

中古文学研究会

源氏物語の人物と構造

笠間書院刊

論集中古文学 5

源氏物語の人物と構造

昭和 57 年 5 月 10 日 初版第 1 刷発行

定価 2,500 円

—検印省略—

編者 中古文学研究会◎

発行者 池田つや子

印刷 科学図書印刷株式会社

製本 有限会社手塚製本所

発行所 有限会社笠間書院

〒101 東京都千代田区猿楽町 2-2-5

電話 03-295-1331 (代) 振替東京 1-56002

書籍コード 3091-913005-0924

『源氏物語の人物と構造』 目次

老人の語りとしての源氏物語——虚構と時間——	永井 和子……………一
〈語り〉と登場人物——雨夜の品定め物語場——	高橋 亨……………一五
もう一人の夕顔——帚木三帖と任氏の物語——	新聞 一美……………二〇
六条御息所の准拠——夕顔巻から葵巻へ——	増田 繁夫……………二五
六条御息所と「まことや」……………	吉海 直人……………二九
玉鬘Ⅱ六条院物語の成立……………	伊藤 博……………二九
「浮舟覚書」……………	今西祐一郎……………二〇
手習巻物怪攷——浮舟物語の主題と構造——	池田 和臣……………二五
源氏物語の人物呼称——「うへ」と語りの問題——	清水婦久子……………二八
中古文学・雑誌紀要論文目録（昭和五年度上半期・下半期）……………	二〇七

老人の語りとしての源氏物語

——虚構と時間——

永井和子

一

物語の語り手(注)は「老女」「古女房」が大方のたてまえである。当面「女」性あるいは「女房」の方は措くとして、なぜ「老人」「古人」でなくてはいけないのであろうか。即ち、作者自身は若からうが老いていようが、仮託された語り手としては老人を想定して虚構世界を構築する必然性はどこにあるのかという問題である。物語は過去を語るものであるから、過去という時間を持つ人間でなくては成立し得ない、という大前提や、いわゆる古代的な昔物語の伝統的形態をここに想起するのは解答として当然であろう。昔物語に於いては、この老人の設定が、物語への信頼性を裏づけており、いわば神的なる存在である老人が価値あるものとしての権威を表現していることになる。

源氏物語においても、右のような解答が当てはまるのは異論のないところであるが、一方では、そのような一般論ですませてしまつてよいのかという思いが強い。大まかにいうと、源氏物語においては作者の老人観が、伝統的な設定をこえて語り手としての人物に反映しているのではないかということである。いかにえれば、物語の内的経験と外的な物語構造とは、かなり密着しているのではないか、という予想でもある。老人の持つ価値、有効性と同時に、たわごとにすぎないという意味における無価値、無効性、をも

充分に考慮した上でのことであるが、老人は不思議なことに、結局事を正すものであるというような物語内部の認識が外側にまで及んでいる可能性はないだろうか。

竹河の巻には様々な問題が存在するものの、冒頭の部分はこの老人の語りという視点をあらわにしている。「女房」の部分は又別として、「老人」の面を考えることとしたい。

これは、源氏の御族にも離れたまへりし後大殿わたりにありける悪御達の落ちとまり残れるが間は語りしおきたるは、紫のゆかりにも似ざめれど、かの女どもの言ひけるは「源氏の御末々にひが事どもものまじりて聞こゆるは、我よりも年の数つもりほけたりける人のひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまことならむ。(日本古典文学全集源氏物語⑤五三ページ。以下引用は同書による。)

もちろんこれは、髭黒大臣方の「古女房」が、源氏方の悪口をいう形であり、同時に「源氏物語」そのものを相対化してしまう語り口である。内容のことは問わないにしても、「語り」は一步あやまれば呆けた老人の繰り言になりかねないことを言いあてていよう。そのあたりが作者の巧みな韜晦なのであるが、源氏物語そのものが、こうした「老人」の語りという微妙、かつ不安定な性格を本来的に有していることを明らかにしている点で大変興味深い。

常識的にいって、老人の見聞した過去の記憶や経験の蓄積、その結果構築されるある世界観、見えてくる真実などが、この現実世界における老人の心的内容には想定されよう。そしてそれらの過去が、明確な筋を持つある流れとして現在に注ぎこむものと意識された時、それは一つの「話」を形成する。しかしその「話」を老人が、なぜどんなきっかけで「語る」という設定になっているのか、という点は今一つ明らかではない。もし「話」の老人の内部における形成と、「語る」ことが同一平面上におかれるのならば、その語りはきわめて拡散化し、日常化してしまうように感じられる。源氏物語は幾人もの女房達の伝承を

記したものと、という意味においてここに「伝承」ということばを用いてもよいのだが、物語を「語る」或いは「語り伝える」という行為は、それほどオープンなものなのだろうか。私はむしろ「沈黙」を破って「語る」ことの意味を考えたい。「話」が語りとして流出するためには、現在が過去の接点として自覚される、ある重要な機があるのではなからうか。語る、という現在の行為がたてまえである以上、その行為をなぜなすのかというあたりも、源氏物語ではたてまえとして考えていたように思われる。過去から見据えて帰納される話は、次第によつては現実秩序を破る何物かであるかもしれない。内部にあるものが外部へと流出するきっかけは何なのだろうか。少なくとも、そこには、老人が当面している現実を超える何物かが存在する。それは、黙ってはいられないほど輝かしいひとのことなのか、或いは、黙っていなくてはいけないのに、その禁忌を破って発言してしまうのか。いずれにせよ「語り」という行為自体の持つ鋭い積極性、特異性をここにみたいのである。ずるずると広がり伸びて、相手かまわずに流露した問わず語りではなく、特定の個人、ないしはグループに対する秘密のうちあけ話、とみてはいけなからうか。終局的にそれが、現実を超えた現実として事の心を明らかにして行くとすれば、ここにはある方便以上の積極的な老人の語りの意味があるはずである。その結果として、現実に対するある特別な強い力を物語自体が獲得しているのではないだろうか。そしてその機、又はきっかけとなる時のことであるが、現実以上のものがあるという認識自体、逆に言えば現実に対する彼の密着度の少なさ、存在感の希薄さが前提となることに外ならない。この価値感の逆転も老人に適わしいものと考えられるのである。

二

以上のような点を考えて、本稿では源氏物語の老人の語りの機能をみて行きたい。

源氏物語には、大小の秘密、当事者だけの個人的なことがらが豊富に内包されているが、それらは次第に他の特定の登場人物の知るところとなり、そのことが物語の進行に決定的にあずかって行くことが多い。いくら隠されているとしても、事実は事実であり、その真の姿や意味があらわされて行くところに物語の方向がかかわって来るのである。善悪を超えて事実を容認しそれによって事の心が明らかに becoming、というのがその方向である。具体的に言えば、父子の縁を正す、血筋の流れを直す、ということがこの物語の大きな意向の一つであろう。こうした物語の大切な節目節目に、老人が秘密を明かす、といったパターンが、用意されている。代表的な例としては、薄雲の巻における老僧の帝に対する密奏、橋姫の巻における弁の尼の薫に対する密事の伝言などがある。これらは、物語上の他の必然的な要素があるにせよ、老人という点では一致しており、同じような話の構造を持っている。

老人が秘密を保持せずに「語る」決意を固めるのは、前述のごとく老人が現実以上の価値を持つ何物かを持つ、と自覚した瞬間であり、それを真なるものと把握したからに外ならない。現実面からみれば、いわば老人の精神の間隙であるが、作者はこうした過去と現在を結ぶ老人の微妙なありようを、たくみに物語の中に布置している。過去にとらわれて現在の秩序を見失う、というほど狂気じみたり呆け果ててはいず、かといって永遠に沈黙してしまうほど現在の重圧がきびしいわけではない。従って現在の状況の中で、誰に、どういう方法で、極秘の事実を告げるのか、ということとは、極めて注意深くえらばれており、老人はある神聖な義務感に促されて事に当たる。ここでは秘密を洩らす、というより、むしろ真実を告げる、という積極的な意味あいを持つ表現の方が適切であろう。

さて冷泉帝、および薫に告げられた、真実の父親は某々である、という驚くべき秘密は、両方とも老人によってもたらされた、という設定の意味を以下考えてみる。前者は父子という私的な縁をこえた、帝位

という公的神聖な重大事にかかわってくることであるから、自ずと物語における扱いも後者とは格段の差の重みを持ち、事の性質もことなるのだが、主として告げる老人の側を中心に考えてみたいと思う。

三

まず薄雲の巻の事件を考えよう。この年（源氏三十二歳）は天変地異がしきりに起り、その上、太政大臣につづいて藤壺中宮も崩御された。こうしたあわただしい空気の中に、夜居の僧が登場する。少し長いが登場場面をひいてみる。

御わざなども過ぎて、事ども静まりて、帝（冷泉）もの心細く思したり。この入道の宮（藤壺）の御母后の御世より伝はりて、次々の御祈禱の師にてさぶらひける僧都、故宮（藤壺）にもいとやむごとなく親しき者に思したりしを、おはやけにも重き御おぼえにて、厳しき御願ども多く立てて、世にかしこき聖なりける、年七十ばかりにて、いまは終りの行ひをせむとて籠りたるが、宮の御事によりて出でたるを、内裏より召しありて常にさぶらはせたまふ。このごろは、なほもとのごとく参りさぶらはるべきよし、大臣（源氏）もすすめのたまへば「今は夜居などいとたへがたうおぼえはべれど、仰せ言のかしこきにより、古き心ざしを添へて」とてさぶらふに、静かなる曉に、人も近くさぶらはず、あるはまかでなどしぬるほどに、古代にうちしはぶきつつ世の中の事ども奏したまふついでに「いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当らむと思ひたまへ憚る方多かれど、知ろしめさぬに罪重くて、天の眼恐ろしく思ひたまへらるることを、心にむせびはべりつつ命終りはべりなば、何の益かはべらむ。仏も心ぎたなしとや思しめさむ」とばかり奏しさして、えうち出でぬことあり。（②、四三九―四四〇ページ）

どういふ事情でこの秘密が帝の耳に入ることになったかを細心の注意を払って説明している。この僧都は
イ 母后の時から代々の祈祷僧としてお仕えし、藤壺にも親しい。

ロ 朝廷の御信任が厚い。

ハ 世の中でも尊ばれている聖僧である。

ニ 年は七十ばかりの老僧である。

という条件を持つ。そして人のお仕えしていない晝方に、ひそかに奏上しようとしているが、僧の側で大変逡巡している。しかしある決意を持って奏上しようとしているのは、帝は知るべきである、自分の命は長くないから、という判断であった。一四歳の大人びた帝は「何ごとならむ。法師は聖といへども、あるまじき横さまのそねみ深く、うたてあるものを」と不審に感じる。この反応は、前のイロハニのイメージを裏返すような醒めた把握である。促されて僧は語り出すのだが、そこでも

かかる老法師の身には、たとひ愁へはべりとも何の悔かはべらむ。(四四〇—四四一ページ)
と、老人であるゆえに決意したことをのべる。

ここで冷泉帝の実の父は源氏であるという事実を告げることによって、今までの「子が、親を自らの下位におく罪」を、正しい父子のあるべき姿に戻そうとする働きがある。もしこの僧都がもっと若かったら、たとい秘密を知っていても奏上しなかったかも知れないのであるが、生涯の終末、七十歳という老人であることによって、可能になったのである。そして「天変頻りにさとし、世の中静かならぬはこの気なり。」と申し上げ、明ではたので退出した。このあたり、「帝の御出生についての重大な秘密が、齢七十の高僧の神さびた口から莊重に語られる所に作者の深甚の用意がある。」(朝日古典全書頭注)との把握もあるが、僧都は「莊重に」或いは「神さびた口から」告げたというよりは、大いに迷い苦しみ、難渋しつつ、

「思ひたまへ消ちてし事を、さらに心より出だしはべりぬること」と泣く泣く奏上するのである。その基となるのは、「老いの身はもうどうなつてもよい。奏上せねばならぬ。」ということであり、更には「奏上しないで命を終えたならば、秘密にしたことが後世の障りとなろう」という積極的な意向を含むようになる。正確に表現すれば、僧都は、それ故に奏上するのだ、という口上を帝に述べるのである。過去の或る価値感、このような「場」の設定と「老僧」の設定によって逆転してしまふ。即ち、現世より後世の方を重くみるという老人の精神構造の間隙が、却つて事を正しくするという事になるのである。

ここにもう一人秘密を知る人物がいる。王命婦である。帝が

またこのことを知りて漏らし伝ふるたぐひやあらむ。(四四二ページ)

とたずねられたのに対し、老僧が

「さらに。なにがしと王命婦とより外の人この事のけしき見たるはべらず。」(同)

と答えたことで冷泉帝もこのことを承知している。帝は王命婦に詳しいことを問いたく思われたが、

今さらに、(藤壺宮が)しか忍びたまひけむこと知りにけり、とかの人(王命婦)にも思はれじ。(四四

五ページ)

と思ひ返されて、ただ源氏に「かかる事の例はありけりや」と問うだけにしようと思ひなやむ。源氏も冷泉帝がこの秘密を知られたことに気づき、王命婦のもとに赴いて、故藤壺宮がこのことを帝にもらされたことがあったかどうか確かめるが、命婦は

「さらに。かけても聞こしめさむことをいみじきことに思しめして、かつは、罪得ることにやと、上の御ためをなほ思しめし嘆きたりし」

と強く否定する。藤壺は、僧都と同じく、帝が知らない、という事は仏罰を得ることになろうかと案じな

がらも、なお「現在」の価値感に従って、秘密を守り通し、三十七歳で死去した。もし藤壺が長寿を得るというように物語が構成されていたら果して秘密は保持されていたであろうか。なお王命婦は若紫の巻において源氏を藤壺の許に導いた藤壺付きの女房である。紅葉賀、葵、賢木に源氏との間を仲介するものとして登場し、賢木では藤壺落飾に従って出家しており、薄雲では御圍殿の曹司に伺候している。藤壺・命婦の二人ともに出家していて仏に近侍しているにもかかわらず、秘密は洩れなかった。しかし、七十歳の老僧からは洩れたのである。他の多くの要因はともかくとして、現在・過去・未来を連接するものとしての老年への意識が、わざわざ七十歳という年齢を設定叙述したゆえんであろう。

源氏と帝は、お互に秘密が明らかになったことを知りつつ暗黙のうちに心を通じ合せるのみで父子の名告りなどしない。この点で物語は現在に強く呪縛されている。そして我々読者は、冷泉帝が以前から源氏と自分の容貌が似ていると思っておられる、という下地があった上での奏上だったので、一も二もなく信じられたこと、又、その眼で源氏の顔を細かく観察して確信を得たこと、などを知っている。そして何よりも、今までの桐壺以来の物語の叙述が、僧都の言のすべてを真なることを保証しているのである。

四

橋姫の巻に移ろう。

宇治の姉妹を訪れた薫の前に、「おいびと（老女房）」が応待に出て来る。

たとしへなくさし過ぐして「あなかたじけなや。かたはらいたき御座のさまにもはべるかな。御簾の内にくそ。若き人々は、もののほど知らぬやうにはべるこそ」など、したたかに言ふ声のさだ過ぎたるも、かたはらいたく君たちは思す。（⑤一三五ページ）

遠慮なくもの馴れた物言いをするこの老女房は、薫を前にして突然泣き出す。

「さし過ぎたる罪もや、と思うたまへ忍ぶれど、あはれなる昔の御物語の、いかならむついでにうち出できこえさせ、片はしをもほめかし知ろしめさせむと、年ごろ念誦のついでにもうちませ思うたまへわたる験にや、うれしきをりにはべるを、まだきにおぼはれはべる涙にくれて、えこそ聞こえさせずはべりけれ」とうちわななく気色、まことにいみじくもの悲しと思へり。(二三六—三三七ページ)ここでは、「さし過ぎたる罪もや」と秘してはいたけれど、どうしても薫に伝えたいことがある、その機会を偶然に得て嬉しい、というわけで、「秘す」方の力より「伝える」力の方が強いことになっている。不審を感じた薫に、実の父は源氏ではなく柏木であるという秘密を唐突に仄かすのである。

「かかるついでしもはべらじかし。また、はべりとも、夜の間のほど知らぬ命の頼むべきにもはべらぬを。さらば、ただ、かかる古者世にはべりけりとばかり知ろしめされはべらなむ。(二三七ページ)生命が長くもない年寄りであるから、この邂逅を逃したくない、という。この女房は柏木の乳母の子で、弁とよばれ、柏木から遺言をきいている、という設定である。薫は詳しい話はきかずに宇治を去る。薫は十月のはじめ又宇治を訪れた。

さて、暁方の宮(八宮)の御行ひしたまふほどに、かの老人召し出でてあひたまへり。姫君の御後見にてさぶらはせたまふ、弁の君とぞいひける。年は六十にすこし足らぬほどなれど、みやびかにゆゑあるけはひして、ものなど聞こゆ。(二五一ページ)

時はやはり暁であり、年齢はここでも「六十にすこし足らぬほど」と明示されている。この事件は

「あはれなる昔の御物語」(弁のことは)

あはれにおぼつかなく(薫が)思しわたる事の筋(地の文)

「あはれなるべき古事ども」(薫の心中)

「あはれなる昔語」(薫の心中)

のように、柏木の若い死や愛からみた「あはれ」の筋からとらえられていて、先の薄雲のようなきびしい禁忌はない。薫はやはり冷泉帝と同じく他に知った人はないかと問うが、弁は

「小侍従と弁と放ちて、また知る人はべらじ。一言にても、また、他人にうちまねびはべらず。」(五二ページ)

と否定する。小侍従死去のことは後に明らかとなるから結局弁のみが知っていることになる。弁は「ささやかにし巻き合はせたる反故どもの、微くさきを袋に縫ひ入れたる」をとり出して薫に渡した。薫は後に、紛れようもないこの証拠の手紙を開いてみる。

かやうの古人は、問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ、と苦しく思せど、かへすがへすも散らさぬよしを誓ひつる、さもや、とまた思ひ乱れたまふ。(一五五ページ)

薫は、この秘密の語り手に対して若干の懸念を抱いているのである。それは、「かやうの古人」という弁への認識であった。単なる「老人」ではなく、自分と異なる身分境遇を背後に持つ「老人」という思いである。それが「問はず語り」をしないかと恐れる。

「かかる対面なくは、罪重き身にて過ぎぬべかりけること」(一五四ページ)

と薫がいうように、実父を知る、という大切なことは果たされたのであり、これは冷泉帝の場合と同様である。そして、その秘密は、「子」に当たる人物にしかもらされてはいない。このあと薫は母女三宮の許に参上する。

いと何心もなく、若やかなるさましたまひて、経読みたまふを恥ぢらひてもて隠したまへり。何か

は、知りにけりとも知られたてまつらむなど、心に籠めてよろづに思ひゐたまへり。(一五七ページ)
源氏・冷泉帝の場合と同じく、女三宮・薫の親子の場合もやはり秘密は「子」の心中にのみ秘されており、「親」にまで共有されることはない。

弁の場合には薫の父が実は柏木である、という事実を証拠の手紙と共に薫に伝えればそれでよいと思われるのだが、弁の口ぶりによると柏木が子にこのことを伝えてほしい、という意向を持っていたようである。その具体的な内容は必ずしも本文からは読みとれない。しかし弁は間違いなく「子」である薫にのみ伝えねばならないという義務感を持って、この機を得たのだった。

さて、この「老女房」の設定はきわめて「物語」の語り手そのものの設定に近いのではないだろうか。

先の薄雲の場合、僧から帝への伝達は専ら「奏す」の語が用いられていたのであり、尚かつそのことを総括する語は特になかったが、橋姫の場合は

御物語 (一三六ページ)

あやしく、夢語、がたり巫女やうのものの問はず語りすらむやうに (一三九ページ)

古物語 (同)

昔語がたり (一五一ページ)

この昔物語 (一五五ページ)

問はず語りにや、あやしきことの例に言ひ出づらむ (一五五ページ)

のように「(昔)物語」を「語」る、の語が用いられている。弁の話全体が「物語」であり、それを古女房である弁が「きき手」である薫にのみ「語る」のである。そしてこの場合弁が老女である意味は、弁の昔の見聞譚である、という点にある。そしてそれは重大な秘密をはらんでいるのであった。薫の方では弁が

他の人にも「問はず語り」をするのではないか、と懸念するが、実はそんなことはなくて、弁は「子」である人物にしかその物語を語ることとはしていないのである。先に引用した竹河の巻が想起されよう。

なお、この弁はこの後、蜻蛉の巻まで登場しつづけ、薫・匂宮や、大君・中君・浮舟たちの間に立つて重要な役割を荷うことになる。若菜下巻によると、源氏は女三宮と柏木の密事を知ったとき、或は父桐壺帝も藤壺とのことを御存知だったのではないか、と恐れたのであった。以上のように、二つの事件の根本的な構造が極めてよく似ている点から推定すると、この源氏の不安は当たっていたのかもしれないのである。

五

以上、薄雲、橋姫、の場合を見てきたが、そのいずれにも共通するのは、重大な場で過去の事実を現在に伝えるのは老人であることである。具体的には父子の血筋を正確に伝達する、ということであるが、いずれも、決して「問はず語り」ではない。現在の時点で、選ばれた個人にのみ伝えるメッセージなのである。個人の意志を超えて、又、現実の秩序を破ってまで、事を明らかにする、というきびしさを持つ。

ここから先は極めて飛躍した考えなのだが、源氏物語全体が光輝とともに多くの秘密を蔵したある一族、たとえば光源氏の血筋、の物語であると仮定するならば、それは、ある老人が、その一族の特定の若い一個人に語った話という設定なのではないのか、という想像である。「きき手」(巻2)は一人という可能性はないか。あたかも薄雲や橋姫で、老人が、ある特定の子にのみ、その父を明かしたように。ここにいう「きき手」とはもちろん物語の内側にある設定のことであって、享受者、受容者のことではない。語り手としての老人は、やはり何らかの意味で、語る機を得、かたる人を得、そのきびしくえられた条件のもとで、始めて語り得た、という面の考慮もあってしかるべきではなからうか。その折の機となるのは、

外的条件のみではなく、老人自身の心理的条件でもあらうことは前述した。竹河の巻にいうように、光源氏のみならず多くの血筋の人々の女房の話が相対的に絡み合って共存していること、及び軽い噂話も混在していること、を認めつつ、なおこのような思いに私を誘うのである。多くのきき手を想定した老女房の間わず語りの集成という設定のほかに、ある人に対する秘密のうちあけ話、といった語りをたてまえた、強さと力と緊張の瞬間をこの物語の中心に感ずるからである。少なくとも、老者が語る、ということの意味は、その力が現実をきり開いてゆく、という、自在かつ積極的な意志として物語がある、ということなのであらう(注3)。

以上「老人の語り」という設定から語りの場を考えてみたのであるが、要は、「語り」には雨夜の品定めのごとき座談の軽い「語り」のほかに、その対極として個対個という極めてきびしい伝達の「語り」もあり得るのであるから、そのような広い視点もこの物語を読む場合には必要ではないかということである。いずれも告白という性質は共通のものであるし、物語史においては、このような語りの場のたてまえても、個々の物語によって自ずと異なるのではなからうか。草子地表現などを含めて、やはり個々の物語がその外側に持つ前提は、内部にその痕跡をのこしているように思う。源氏物語の場合、「老女房」の属性のうち、「老」に比重をかけて読むと、ややこのあたりの視野が開けるのではないか、という一つの試みである。なお考えるべき問題は多い。物語の歴史という広い場に立つて、今後の課題として行きたい。

注(1)

語り手の位相について触れた論文としては次のようなものがある。榎本正純氏「源氏物語における語りの諸問題」(国語と国文学、昭和51年11月号)、同「源氏物語の語り手・構造の表現」(論集中古文学Ⅰ、所収、昭和54年5月)、高橋亨氏「八語りVの表現構造——いわゆる草子地について——」(講座日本文学源氏物語下、昭和53年5月)など。